S.C.ユー

会計理論の構造

—認識論と方法論—

小樽商科大学教授
久野 光朗 監訳

THE STRUCTURE OF
ACCOUNTING THEORY
BY
SHIH CHENG YU

同文舘

〈監訳者略歴〉

久野　光朗（くの・みつろう）

1931年9月　東京に生まれる
1955年3月　一橋大学商学部卒業
1957年3月　一橋大学大学院商学研究科修士課程修了
1957年4月　小樽商科大学商学部講師
1970年2月　小樽商科大学商学部教授
1973年12月　文部省在外研究員としてイリノイ大学を中心に1年間にわたり海外留学
1976年7月　小樽商科大学学生部長（任期2年）
1980年2月　小樽商科大学附属図書館長（現在）
主要業績　訳著,『ギルマン会計学（上）・（中）・（下）』（同文舘，1965・1967・1972）——1973年の日本会計研究学会で学会賞（太田賞）を授与
現住所　（〒047-01）小樽市新光 4-24-7

昭和57年4月30日　初版発行　　≪検印省略≫
略称—ユー会計

S.C. ユー
会計理論の構造　　定価 ¥3,000

監訳者　久野光朗
発行者　中島朝彦

発行所　同文舘出版株式会社
東京都千代田区神田神保町 1-41　〒101
電話（東京）294-1801～6 振替東京 0-42935

© M. KUNO
Printed in Japan 1982　　印刷：三美印刷
製本：雄正社
ISBN 4-495-14931-8

原著者 Shih Cheng Yu の紹介

<略　歴>

1921年10月5日　中国で誕生．中国名は于　世正．

1945年　輔仁大学（北京）で学士号取得．

1949年　アイオワ大学で修士号取得．

1952年　アイオワ大学で博士号取得．

1955年～1959年　アイダホ州立大学助教授．

1959年～1960年　メイン大学助教授．

1960年～1964年　メイン大学準教授．

1964年～1967年　メイン大学教授．

1967年～現　在　フロリダ大学教授．

<研究・教育の関心領域>

財務会計論と研究方法論（とくに科学の哲学）

<主要業績>

"Macroaccounting and Some of Its Basic Problems," *The Accounting Review*, April 1957.

"National Position Statement: A Proposal on Operational Principles and Process," *The Accounting Review*, January 1959.

"Microaccounting and Macroaccounting," *The Accounting Review*, January 1966.

"An Appraisal of Macroaccounting," *Aspects of Contemporary Accounting*, Accounting Series No. 4, 1966.

"Is the New U.S. Budget a More Understandable Document?" *The International Journal of Accounting*, Spring 1968.

"A Flow-of-Resources Statement for Business Enterprises," *The Accounting Review*, July 1969.

"A Reexamination of the Going Concern Postulate," *The International Journal of Accounting*, Spring 1971.

"The Several Modes of Normative Accounting Thought: A Critical Examination," *The International Journal of Accounting*, Spring 1974.

The Structure of Accounting Theory (Gainesville: The University Presses of Florida, 1976——Second Printing, 1978), pp. vii+319.

<現在進行中の研究>

"On Empirical Research in Accounting: A Methodological Exposition," *The Structure of Accounting Theory II.*

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日本語版への序文

The Structure of Accounting Theory の日本語版を大歓迎します．私は，日本の読者が，経験科学における研究は公式的方法論と知識獲得の諸条件に順応しなければならないという考えを私と共有してくれることを期待します．

私が本書を執筆し始めたのは，1970年代の初頭，フロリダ大学の博士課程のセミナーで会計学の哲学を指導していたときのことです．当時の会計文献には，とくに科学の哲学という思考様式に照らして，理論の構築と検証の基盤を詳述する適当な著書や論文がありませんでした．たとえば，大部分の大学院生たちは経験科学，理論，および命題というような基本的術語を十分に説明することすらできなかったにもかかわらず，理論的ならびに科学的な論文を読んで評価することが要請されていたのです．

経験科学の研究を左右する方法論の諸原則や諸通則には国境がなく，したがってそれらは普遍的であることに注意を向けてみることは励みになります．方法論と真実性規準に関するかぎり，自然科学と社会科学とに根本的相違は存在しないというのが私の信念でもあります．もちろん，これら2つの広範な学問分野の主題に関する困難性と錯綜性には基本的相違があります．

私は，小樽商科大学の久野光朗教授が本書に関心を持ってくれたことに対し深く感謝いたします．1978年の末から1979年にかけて小樽商科大学で開催された会計学研究会の論議で本書を選択してくれた久野教授の同僚の方たちに対しても謝意を表します．

S. C. Yu
University of Florida
Gainesville, Florida
November 1981

監訳者のことば

本書は，Shih Cheng Yu, *The Structure of Accounting Theory* (Gainesville: The University Presses of Florida, 1976——Second Printing, 1978), pp. vii+319 を全訳したものである．原著の内容と構成に関しては，第1章の序説で原著者自身が解説しているので，ここでは本訳書が刊行されるまでの経緯を明らかにしておきたい．

原著は，1978年の末から1979年の春にかけて，小樽商科大学の会計学関係教官を中心とした会計学研究会で論議の素材として採用された．研究会では，各章の担当者が邦訳して発表しながら問題点の論議を進めていった．その結果，多少ペダンティックな面も散見されたが，認識論と方法論に関する数すくない貴重な先駆的文献のひとつであることがわかり，ひろくわが国の会計研究者に紹介の労をとるだけの価値があると判断した．かくして，筆者が監訳者として邦訳出版の手続をとるにいたったのである．

邦訳にあたっては，研究会のメンバー全員が数回にわたって会合を開き，まず索引を参照して術語の統一をはかり，さらに，かな使いの統一などについても協議したあと，各章の担当者から監訳者に第一次邦訳原稿を提出してもらった．監訳者は，その原稿について徹底的に添削をほどこし，それを各担当者に提示したうえで解釈の相違点について調整を行い，そのあと各担当者から再度改訂原稿を提出してもらい，最終的には監訳者の責任において細部にわたる字句の統一をはかった．したがって，本訳書は，各章の邦訳原稿を機械的に寄せ集めたものではなく，研究会のメンバー全員による真摯な努力と協力の成果であると自負している．

しかしながら，原著は，数学や論理学のみならず，心理学，哲学，社会学，経済学，さらには生物学，物理学，量子力学などの分野をも考察の対象に含め

ており，それらの内容を完全に理解することは非常に困難である．そのため，邦訳にあたって思わぬ誤謬をおかしていることもあると考えられる．かかる誤謬については，読者諸賢からの御叱正と御教示をもいただいたうえ，機会に恵まれれば，できるだけ早く訂正する所存である．

最後に，市場性の乏しい本訳書の出版を引き受けてくれた同文舘の方たち——中島朝彦社長や今井雪夫営業部長，また校正その他の出版手続でお世話になった出版部松元　司氏に対して，心から厚くお礼を申しあげたい．

小樽商科大学附属図書館にて
1982年1月23日
久　野　光　朗

凡　　例

訳文は原文に忠実であることを意図したが，理解を容易にするため意訳したところもあり，全体としては直訳と意訳の中間になっている．訳書と原書との間における文字や記号などの参照関係は次のとおりである．

1. 原書の注記は訳書でも原書に従って各章の末尾に一括して示した．

2. 原書のイタリック体は訳書においては傍点で示したが，大・中・小の各見出しはゴシック体で示した．書名および雑誌名に関しては，本書が学術書である点にかんがみて，イタリック体の原語のまま示した．なお，同じ趣旨に基づいて，人名もすべて原語で示した．

3. 原書における（　）は訳書でも（　）で示したが，さらに訳書では術語を明示するため（　）を使用した．

4. 原書における“　”は「　」で示したが，引用論文名を示す場合には訳書でも原書どおりにした．

5. 索引は大体原書に従って作成したが，事項索引と人名索引とを別々に作成した．なお，本文には原則として原語を挿入しなかったので，索引の訳語の次に（　）をもって示した．

6. 原書との参照を容易にするため，訳書では頁数を付してある側に原書の頁をも明示した．

各章の邦訳担当者

第1章	久野光朗	(小樽商科大学教授)
第2章	福島吉春	(小樽商科大学講師)
第3章	渡辺和夫	(小樽商科大学短期大学部助教授)
第4章	久野光朗	
	片山郁雄	(北海道自動車短期大学講師)
第5章	中善宏	(小樽商科大学助教授)
	金井光一	(小樽商科大学大学院修士課程修了)
第6章	長井敏行	(専修大学北海道短期大学助教授)
第7章	隅田一豊	(札幌商科大学教授)
第8章	田中良三	(小樽商科大学短期大学部助教授)
第9章	山田壹生	(小樽商科大学教授)
	渡辺慶和	(小樽商科大学大学院修士課程修了)

目　　次

第1章　序　　説 …… 3

第2章　体系的学問と研究方法論 …… 7

科学の意味 …… 7

仮説，理論，モデル，および法則 …… 9

構造とシステム …… 10

研究方法論 …… 11

演 繹 法 …… 11

帰 納 法 …… 13

演繹法，帰納法，および科学的方法 …… 14

システムズ・アプローチと一般システム論 …… 19

一般システム論の哲学的基礎と創発の問題 …… 20

全体性の意味と知識の統一性 …… 21

機能的全体の非加法性 …… 22

システムの操作的定義 …… 23

システムズ・アプローチの会計研究に対する関連性 …… 24

論理学と科学 …… 24

理論，事実，および実践 …… 26

社会科学と自然科学 …… 27

第3章　会計学とその境界領域 …… 33

会計学に関する各種の説明 …… 33

内部利用者のための会計と外部利用者のための会計 …… 34

経済学の一分野としての会計 …… 35

応用科学としての会計 …… 35

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

情報システムとしての会計 ……36
測定―伝達論としての会計 ……36
一般意思決定理論の一部としての会計 ……38
社会経済学としての会計 ……38
科学的研究分野としての会計 ……39
広義の会計および会計理論の一般構造に対するその関連性 ……41
会計学の境界領域の拡大 ……42
会計における経験的研究 ……44

第4章 会計命題の性質，意味，および認識論的基礎……47
命 題 ……47
分析命題と総合命題 ……48
会計の原始命題の性質，意味，定式化，および機能 ……51
「自明」という観念と会計公準 ……54
定 義 ……56
概 念 ……60
概念の定式化 ……61
理論的構成概念，経験的概念，および操作的概念 ……62

第5章 会計思考の規範的様式と実証的様式……71
規範的会計……72
規範的言明の基本的性質と意味 ……72
若干の規範的会計思考様式 ……74
倫理的会計 ……75
社会厚生会計 ……79
利用者指向会計 ……82
効率的市場仮説 (EMH) ……84
規範的演繹論 ……86
目標決定問題 ……88
実証的会計……90
実証的会計の性質と意味 ……90

会計思考の実証学派 ……91
要約と結論——会計学の2つの側面の評価 ……95
補　遺：規範的主張の認識論的基礎——倫理哲学の若干の様式 ……105
ギリシャ哲学者の倫理的思考 ……105
近代哲学の倫理的思考 ……107
スピノザの決定論 ……107
形式主義 ……109
功利主義 ……109
進 化 論 ……110
近代経験主義の倫理的立場 ……111
プラグマチズムと概念道具主義 ……111
論理実証主義 ……112

第6章　測定と会計 ……115
測定の意味および特性 ……116
測定の尺度 ……118
測定の種類 ……124
量子力学上の測定および会計測定に対するその関連性 ……126
理論的構成概念，定義，および測定 ……131
会計上の測定とその若干の基本問題 ……133

第7章　体系的説明——基本原理 ……141
体系的説明様式 ……141
研究分野の基礎 ……143
一組の基本的会計公準試案に対するガイドラインの規準 ……145
仮説——科学的探究の作業基準 ……147
仮説の定式化および展開のための公式的条件 ……148
蓋然的推理，検証，および一般化 ……149
会計仮説の諸条件および方法論的諸要件 ……153

第8章 会計の体系的説明——会計学の基礎 ……157
一組の会計公準試案……157
動機づけと行動……158
手段の稀少性……164
ストックとフロー……165
自由企業体制……165
会計実体……167
継続企業……169
効 用……172
経済事象と会計取引……174
測 定……176
測定単位……177
期 間 性……178
伝 達……178
補 遺：会計公準の歴史的概観 ……184

第9章 会計の体系的説明——会計実体モデルの本質……195
モデル構築の性質および意味——約言 ……196
会計実体，会計測定の能力，および人的要素 ……197
会計モデルの本質……200
ストックとフローの相互作用……201
営業循環……207
会計の一般仮説と下位仮説 ……208
会計仮説の検証と総合……210

I 事項索引 ……215
II 人名索引 ……221

会計理論の構造

——認識論と方法論——

第1章　序　　説

論理学や数学の例外はあるけれども，すべての研究分野は，概して，事実上 p. 1
経験的であり，ある経験的研究分野は，説明と予測に関して実在世界の特定種類の現象（すなわち，全環境の一部面）を扱うものである．操作にあたって，各経験的研究分野は，その依拠する基盤を必要とし，またその特定種類の事象を説明し予測しうる概念的枠組を必要とする．この文脈における「研究分野」という用語は体系的学問の一分野と規定され，それはその知識獲得の過程を規制する一組の公式的通則によって支配される．会計は一群の経済現象を分類し，記述し，集約し，かつ解釈することにかかわっているので，本来それは上記の研究分野の規定に該当すると考えられる．しかしながら，現在のところ，会計は p. 2
体系的学問の一分野とは見なしえない．その主たる理由は，体系的意味において，その会計事象の説明と予測を嚮導する概念的枠組を欠いているからである．

ある経験的研究分野の概念的枠組を構築するには，一組の公式的通則（方法論）のみならず，知識獲得の諸条件（認識論）の明確な理解をも必要とする．本書が意図するところは，会計上の理論の構築と検証に関する方法論的解明を提示することである．会計理論そのものを扱うのではない．われわれの主たる目的は，論理的ならびに（あるいは）経験的に妥当する立派な構造形式の知識として，理論の本質と機能を探究することにある．「構造」という言葉は，ある理論の構成要素間の諸関係を表わしている．

一般に経験的研究分野，とくに会計における理論形成に関して，われわれは論理経験主義として知られている思考様式を支持するのであるが，それは，初期の経験主義と異なり，理論形成にあたっては構文論的通則と意味論的通則を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com